

平成29年度

学校評価総括表

奈良県立青翔中学校

奈良県立青翔高等学校

(別紙1)

平成29年度

学校評価計画表

奈良県立青翔中学校・青翔高等学校

学校運営計画 (4月)		総合評価	
教育目標	<p>本校の教育は、法に定められた根本精神と、本県学校教育の指導方針に基づき、豊かな人間性や社会性を培うとともに、科学的な思考力と創造性を身につけ、科学技術の発展と進歩に寄与する心身ともに健全な人間の育成を目指す。</p> <p>(1) 豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。                      (2) 科学的な思考力を培い、自ら学び、自ら考える力を育てる。                      (3) 個性の伸長に努め、意欲的な進路実現を目指す。                      (4) 日々の生活の中から共生の精神を養い、幅広い社会性を育てる。                      (5) 生涯にわたって、自らの健康と安全を維持できる実践力を育てる。</p>	B	
運営方針	<p>全教職員の持てる力を結集し、明るく元気でさわやかな学校づくりを目指す。そして、あらゆる機会(Chance)を生かし、自分を変革し高め(Change)、粘り強く挑戦する(Challenge)生徒の育成を目指す。</p> <p>また、開校4年目の青翔中学校のスムーズな運営と特色ある学校づくりに向け、教育委員会とも連携して取り組む。</p>		
平成28年度の成果と課題	<p>本年度重点目標</p> <p>具体的目標</p>		
<p>全国初の理数科単科高校として開校して13年が経過、この間、理数科の特色ある様々な教育活動の取組と成果が評価され、文部科学省から2期目のスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けた。また、タイ国の王立サイエンスハイスクールの姉妹校との共同研究および国際学会での発表など理数教育を中心に国際的な交流を進めてきた。</p> <p>SSH指定研究を軸として、学校設定科目「スーパー探究科学」の成果を各学会において発表し、各種コンテストにも積極的に参加するなど、実績を着実に積み上げつつある。</p> <p>生徒には、これらの力を育成し、併せて規範意識の高揚、生徒会活動、課外活動、部活動など生徒の活動の活性化に向けての取組を引き続き推進していく。生徒の努力もあり、本年度の国公立合格者は6名であった。</p> <p>SSH2期目2年目を迎え、実績・成果を目に見える形にし、さらに成果を発展的に積み上げる努力が求められるとともに、教科間の連携、教科横断的な取組、地域との連携等に力をそそぎ、奈良県中南部の進学拠点校としての役割を果たす必要がある。</p> <p>また、奈良県初の併設型県立中学校の学校経営を軌道に乗せ、魅力と特色のある中高一貫教育校となるよう取り組まなければならない。</p>	<p>開校4年目を迎えた青翔中学校の存在価値と評価を確立するため、中高一貫教育校としての将来を展望した魅力と特色ある学校運営をめざす。</p>		<p>県教育委員会指導の下、青翔中学校の施設・設備、教育課程、その他教育環境等を学年進行とともに整えていく。6年間を見通した中高一貫教育の内容を明確にし、保護者会、学級通信の発行などの他、小学生及びその保護者等への積極的な広報を展開する。</p>
	<p>教職員は、教育専門職としての自覚のもとに、常に研鑽に努め、指導力の向上を図るとともに、各々のもつ特性を生かして、中高一貫教育を展望した特色ある学校づくりに努める。</p>		<p>研修に対する意識の高揚を図り、公開研究授業を実施し、情報の共有化と共通理解を推進する。青翔中学校と青翔高等学校を一体としたリーフレットの作成、学校だよりの発行、Web Siteの充実等による積極的な広報を展開する。また、教員の学会発表など外部での発表を推奨していく。</p>
	<p>自ら探究する力や伝える力を身につけさせ、生徒が夢を実現できる学校づくりに努める。</p> <p>SSHの取組の一環として、タイのサイエンスハイスクールとの交流を進展させる。</p> <p>地域との連携を一層充実させ「地域の学校」を目指す。</p> <p>中学校において、SSHの取組を段階的に取り入れ、生徒が興味関心を抱くようにする。</p>		<p>探究活動の充実に努め、各種学会発表・コンテストにも積極的に参加する(延120人)。また、本校独自の理数科教育システムを活用し、国公立大学及び難関私立大学理系学部への進学者30名以上を目指し組織的に進路指導に取り組む。</p> <p>タイのサイエンスハイスクールと共同研究を実施し、生徒・教員の交流に積極的に取り組み、タイ姉妹校で行われる「発表会」に参加する。また、国際学会にも参加する。</p> <p>中学校でのSSH事業の展開の仕方について検討し実践する。</p>
	<p>生徒の自主性を育て、互いに認め合い高めあう集団づくりに努める。豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。</p> <p>人権を尊重し合える集団の確立と、自他を敬愛する心や公共心・道徳心、規範意識および国や地域社会を愛する心の高揚に努める。</p>		<p>生徒一人一人の人権感覚・人権意識を高め、人間としての生き方やあり方を考えさせ、明るく温かい人間関係を醸成する。</p> <p>HR活動を充実させるとともに、学校生活のあらゆる場面で、基本的な生活習慣の確立ときめ細かな生活指導を行う。</p> <p>全教育活動に道徳教育の観点を入れ、規範意識を高め国や地域社会を愛するための地域活動、ボランティア活動等にも積極的に参加する。</p>
	<p>外進生の募集停止により6年制を見通した高校カリキュラムの改善を進めていく。</p> <p>教科指導力を高め、ねらいを明確にした授業及び指導法の研究・実践に努め、生徒の基礎学力の定着と応用力の向上を図る。さらに、教科指導を通じ、科学的な思考力の育成に努める。</p>		<p>家庭学習の定着を目指し、基礎学力とともに高度な学力を計画的に育成する。土曜・長期休業中の学力向上講座、ステップアップ講座、学力補充講座、勉強合宿等を実施する。青翔アラカルト・ワークショップを実施し、科学的な思考力の育成に努める。また、教材研究、指導法や評価について指導主事の招聘や教育研究所の講座を活用し積極的に研修に努める。</p>
	<p>日常の教育活動を点検し、学校・家庭・地域の連携をさらに深める。生徒の実態を的確に把握して、個に応じた適切な指導・支援に努め、健全な発達を促す。</p>		<p>生徒が抱える問題の早期発見、早期解決に努める。生徒理解に努め潜在能力を発見し引き出し、実体験をとおして「努力」が「よるこび」や「やりがい」につながる成就感や達成感を体得させるとともに、探究心や向上心を育む。</p>
	<p>学校経営・運営上のあらゆる場面から課題を見直し、その対策に取り組む。</p>		<p>部活動の活動状況や部員数等から、中学中心の活動にシフトする。進路指導・教科指導法等ダブルスタンダードに対応できる、教員の意識改変と「力」の育成に努める。</p>

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策		
教 務	中高一貫教育の6年間を見通し、生徒の発達段階に応じた指導法と制度の確立を図る。	中高6年間の生徒の特徴や発達段階を視野に入れた学校行事の計画や効果的な教育課程の作成に取り組む。	A	B	教育課程検討委員会を数多くもち、中高6年間の発達段階を視野に入れた教育課程を作成した。 中学校での先取り学習を考慮した学習内容と効果的な指導法について研究し、授業実践した。	来年度は7時間授業の増加と土曜授業の実施により生じる問題点をその都度、検討を加えていく。	中高一貫6年間を見越した学習とSSHの理数教育をともに考えた教育課程の編成に取り組んでいる。 年2回の授業公開に加えて、中学生の発達段階を考えた小学校への授業参観・懇談と新しい研修も取り入れている。 高校でも観点別評価を実施し、生徒が学習状況を確認でき、学習意欲の向上に生かせるようにしている。 生活アンケートを実施し、生徒の日々の状況を把握し、主体的に学習する態度の育成に取り組んでいる。		
		中学1期生が高校に入学することになり、先取り学習等も含めた中高一貫の効果的な指導法の確立に取り組む。	B						
	ねらいを明確にした授業を実践し、思考力・応用力を高める指導に取り組む。	授業公開を行い、自己の授業を振り返るとともに、他の教員の授業を参観し、研修を深め、指導力の向上に取り組む。	A	A				2回の授業公開を行い、他の教員の授業を参観し、自己研修を行った。参観した教員は85%であった。さらに中学生の発達段階を理解するために、小学校の授業を参観し、小学校の先生と懇談会をもち、研修を深めた。 観点別評価を実施し、日々のねらいを明確にした授業の実践に努めた。	従来からの評価方法と観点別評価の相関性について考え、教育課程検討委員会等で審議し、検討を加えていく。
		日々の授業のねらいを明確にし、分かる授業を実践し、指導法や評価についての研修を深めるとともに、情報の共有化と共通理解を図る。	A						
	生徒の基礎学力の定着を図り、学習意欲を高め、主体的に学習する力の向上を図る。	個別指導や学力補充講座等を実施し、きめ細かい指導により、生徒個々の基礎学力を高める。	B	B				長期休業中の集中授業や学力補充講座を実施し、基礎学力の向上に努めた。生活アンケートを実施し、生徒の様子を把握し、以後の指導に活用した。毎日少しでも学習する生徒は、中学生で89%、高校性で72%であった。考査前は共に90%を越えていた。	主体的に学習する態度を育成するために、生徒に学習への興味・関心を高められる授業の実践を行う。
		生徒の生活実態を的確に把握し、課題の提出・点検等により、主体的に学習する態度を養う。毎日、家庭学習をする生徒80%以上をめざす。	B						

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策			
	現在取り組んでいる全校体制による生徒指導をより一層、強化・推進し、基本的生活習慣の定着と規範意識の積極的啓発を図る。その結果として、生徒自身が誇りをもてる学校づくりを目指す。	校門指導・昇降口指導・校内巡視などを毎日行い、生徒とのコミュニケーションを図る中で、生徒理解に繋げ、規範意識高揚を図る。	A		<p>本年度は「青翔マナーアップキャンペーン」を8週間に亘って実施した。一定の成果を得て、本校の課題も見えてきたように思う。問題行動や特別指導は非常に少なく、生徒たちは落ち着いた学校生活を送っている。しかし、なかなか学校側の思いが伝わらない生徒の対応に時間を取られている現状がある。引き続き、愛校心の喚起と帰属意識の発揚を促し、生徒の自主的自発的な行動を期待したい。</p> <p>不注意による入室遅れはほぼ皆無と言えるが、朝の遅刻はなかなか減少しない。基本的生活習慣確立のため、家庭との連携をさらに密にしたい。</p>	<p>各種集会を効果的に利用して、規範意識を向上させるような働きかけを行う。マナーアップキャンペーンを全校体制で行うことで教員側に「率先垂範」の意識を以てもらいたい。</p> <p>教員間の情報交換や保護者との連携を効果的に行う。特に初期対応に際しては、迅速かつ慎重を期す必要がある。</p>	<p>全ての教職員が日々の校門指導昇降口指導、校内巡視等を行い、生徒とのコミュニケーションを取りながら生徒理解を図り、規範意識の向上に取り組んでいる。</p> <p>特に今年度は「マナーアップキャンペーン」に取り組み一定の成果があった。</p>			
	中1から高3までの学年の幅にわたる生徒が安心して登校し、生活できる学校を目指す。	時間厳守の精神を徹底し、遅刻や入室遅れの絶無を目指す。挨拶を励行し、元気できびきびした生活習慣の確立を図る。	B	A						
生徒指導	中1から高3までの学年の幅にわたる生徒が安心して登校し、生活できる学校を目指す。	様々な行事や集会等の機会を通じて、帰属意識と愛校心の高揚を図る。	A					<p>家庭内の問題や交友関係に適応できず、日々の生活に支障を来している生徒に対して、効果的な指導や助言を行う難しさを感じている。</p> <p>1学期末の県一斉のいじめアンケートに加え、2学期末には本校独自のいじめアンケートを実施した。学年主導で丁寧な聞き取り調査を実施してもらったが、現在のところ深刻なケースは報告されていない。</p> <p>ほとんどの生徒がスマートフォンを使用しているため、LINEなどのアプリによるトラブルも数件報告があった。コミュニケーションや対人関係などについて考える機会を持たせたい。</p> <p>数年前から朝の校門指導と昼休みの校内巡視を全校体制で行っている。全教員が交代で校門に立ち、昼食時に生徒に声かけをした。生徒たちの表情と内面の変化を早期に捉えることができた。</p>	<p>学校や生徒を取り巻く環境が刻々と変化する現在、教員向けの生徒指導研修会を積極的に企画し、今にふさわしい生徒指導の構築を目指したい。</p> <p>朝夕の校門指導・昼休みの校内巡視・定期的な校外巡回指導などに加え、マナーアップキャンペーンを定期的に行い、全校体制で学校を挙げての生徒指導に取り組んでいきたい。</p>	<p>生徒の実態をアンケートなどでよく捉え、教職員間で共通理解の下、連携協力して生徒指導に取り組んでいる。</p> <p>いじめ等に関しては、アンケート等で把握に努め、いじめの防止・指導に取り組んでいる。</p> <p>薬物の乱用防止やネット犯罪、制服の着こなし等の講演会をもつなど、計画的に規範意識の高揚を図っている。</p>
		カウンセリングマインドをもって、生徒の悩みを積極的・共感的に受け止め、これに応える指導や助言を与える。人権教育部・養護教諭との連携を密にする。	B	B						
		教員と生徒の人的ふれあいを大切に、生徒一人一人の個性・特徴を生かし、大切に、内面に迫る指導を心掛ける。	A							

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策		
保健体育	体育活動をとおり健康の意義を踏まえ、健康の維持増進、体力づくりを基盤に「生きる力」を育む。 授業をとおり、体育行事への積極参加と主体的な行動を促す。	教職員自らが健康の維持増進・体力づくりの必要性を共通理解し、授業の安全性を踏まえ積極的な工夫改善に努める。	A	A	学校行事（球技大会・体育大会）をとおり、生徒たちと積極的に関わること、健康の大切さを体感し自覚できた。 授業に関しては問題はなく、連携を保ちながら進めることが出来た。各行事に関しては教師側の指導が先行し、自主性を引き出せなかったが、生徒は積極的に参加し活動できた。	生徒に自主性が育つ指導が求められる。 計画から実施に至る運営にもっと関わらせることで充実感・達成感を体験させることが必要であると考えられる。	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策 体育大会、球技大会については、高校生と中学生の合同開催は体力等の差があるため、種目及び競技方法についてはさらなる検討が必要である。 防災計画による避難訓練の実施、校内の救急体制などを明確にし、安全管理に努めている。		
		運動・スポーツに主体的に取り組むことにより、体を動かすことの大切さや喜びを体感するとともに、自らの健康を維持できる実践力を育てる。とくに体育行事へは、100%の参加率を目指す。また、社会の一員としての役割を意識させ、地域の催しやボランティア活動への参加を促す。	A						
		中高一貫教育の特性を踏まえ、集団での「個」を自覚させ、協調と責任ある行動をとれるよう中学、高1の集団行動を徹底する。また、高校2・3年生が自ら行う選択授業の主体的かつ能動的な取組を促す。	B						
	保健活動をとおり何よりも「健康」であることの大切さを自覚し、自らを改善していく資質と能力を育む。	各種検診（健康診断）の受診率100%を目標に日程や時間帯の調整を図り、受診しやすい環境づくりに努める。	A		B	ほとんどの生徒は指導に従うが、その反面、受動的にしか行動できない生徒も多い。		能動的な行動への意識改革。（生徒との多くの時間を共有し、コミュニケーションをとる）	
		生徒の健康保持・増進のため、生活実態調査や健康だより等により、随時健康管理を促すとともに各検診の完全受診を促す。また、食育を含むアドバイス・個別指導の充実を図る。	B			学校医の協力を得て欠席者健診の機会を作り、全員が受けられるよう努めている。尿検査で100%を達成できた。		中高一貫校の特性を生かし、6年間を見通した保健指導と健康管理を行う。健康診断の意義を認識し、早期発見・早期治療のために健康診断を主体的に受ける態度を養う。	心電図検査を除き、健康診断後の受診率が低い。健康診断の意義を再確認し、早期発見、早期治療につながるような指導が必要である。 基本的な生活習慣の乱れから、身体的症状が現れていると思われるケースが少なくない
		欠席者サーベイランスの活用とともに、各種感染症へ迅速に対応する。また、カウンセリングの推進・充実を図り、生徒の心のケアに努める。	B			定期健康診断結果による治療勧告後の受診率も年々向上している。中学生に対しては集団指導を実施、疾患を持つ生徒に対しては個別指導をしている。保健だより等により、全体への啓発を行った。		感染症予防の取組を進めるとともに、集団発生時には迅速に対応する。	
人権教育 特別支援教育	様々な人権問題についての認識を深め、より充実した実践に努める。	様々な人権問題についての教職員の共通理解のもと人権教育に取り組む体制を構築するため、年1、2回の職員研修を実施し、校外の研修にも参加する。	A	B	職員研修は「保護者対応について」本校の実情に応じて実施した。校外の研修も、人教部を中心に随時参加した。来年度は「多様性について」の研修を実施。 HRを人権講演会に当てたが、琴線に触れる内容で好評であった。文化祭では人権委員会が展示発表をした。HR指導案は現状にあったものに刷新していく。	多様な生徒を理解し、よりよい関わりや指導ができる研修を企画する。 中学、高校6年間で系統立った人権LHRを企画・立案し、人権教育の更なる充実を目指す。	新入生対象のアンケート調査、人権ホームルーム、講演会を行うなど計画的に人権教育に取り組んでいる。 人権だよりの発行などで、保護者への人権に関する啓発も行ってきている。 担任・学年主任とスクールカウンセラー、コーディネーターが組織的に連携できている。 配慮を要する生徒に対する一層の組織的取組を期待したい。		
		生徒の実態に即した人権LHRを企画・立案する。さらに中学、高校6年間で系統立った人権教育の構築を目指し、内容の充実を図る。人権委員会、生徒の活動を活性化する。	B						
	支援が必要な生徒を支える学校の体制づくりに努める。カウンセリングの充実を通して、的確な生徒理解と適切な支援に取り組む。	生徒一人一人の実態や状況を把握し、それぞれの生徒の成長を促す関わりに努める。課題を抱える生徒には、早期に個別の対応に関係者と連携して進める。 スクールカウンセラー、担任、家庭、外部機関などと連携して、支援を必要とする生徒等のケアに努める。	A					B	不登校、いじめ、人間関係、家庭状況、学習面、問題行動等、生徒が抱える課題を把握し、担任・学年主任・スクールカウンセラー等と連携しながら対応した。 カウンセラーのアドバイスを受けながら個々の生徒に適切な支援ができるように努めた。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
文化図書	文化祭をとおして文化教育の充実と活性化を図り、クラスの団結力を一層強める。	文化委員がクラスを中心となり、まとめていく存在となるよう文化委員会の活性化を図る。また、できるだけ生徒の意見を企画・運営に反映させながら、生徒自らが作り上げる文化祭を目指す。	A	A	A	舞台発表はクラスの一体感が感じられ、鑑賞態度も良かった。模擬店のマナーも良く、生徒が作り上げる文化祭になりつつある。展示については集客が良くなく、改善の余地がある。	今年度から生徒数減により生徒会費や育友会費の総額が減っている。その金額に見合う予算を立て、準備に時間をかけさせる。 図書室文化講座のテーマは教科等と相談のうえ決定したい。	文化祭では生徒に達成感をもたせる結果とすることができた。  さらなる読書活動の充実が望まれる。
	読書指導の充実を図る。	新入生への図書室オリエンテーションを実施する。年9回の「図書室だより」の発行等、図書委員会活動の活性化を図る。 学級文庫を配置する。また、生徒の要望に添った図書を購入することで生徒の読書意欲を高める。図書室に「テーマによる展示コーナー」を設け、生徒の関心を高める工夫を行う。	A			「図書室だより」には図書委員の推薦図書を掲載し、生徒による運営ができた。図書室利用のマナーも良く、生徒や教員からの寄贈図書が増えた。 文化講座のテーマは、生徒の興味を引くものではなかった。		
環境整備	自主的な清掃活動を推進し、生徒の美化意識向上を図り、学校環境の美化を推進する。	日常の学校生活で、ゴミの持ち帰り等のゴミの減量化や分別を徹底する。リサイクル運動に取り組み、環境美化の意識を高め、快適な学校環境の実現を図る。	B	A	A	日々の清掃は熱心にやっている。昨年度は行事前の大掃除ではやり残しもあったので、前々日から徐々に取り組みよう指示した。	今年度から学級数減により、清掃分担区域を統合している。計画的に清掃に取り組む。  委員数減に応じて有志生徒に呼びかける。	清掃活動にボランティア活動や体験的な活動をうまく取り入れている。
		年3回の通学路清掃を通じて、生徒の美化意識の向上を図り、地域との関わりを深める。	A			各委員会に加えて、生徒会役員や運動部有志も清掃に参加した。		
広報活動	適切な広報活動を展開する。	小学校及び塾などを訪問し、全職員の協力のもと、県内の小学生・保護者等に本校の特色や活動内容をよりよく知ってもらう取り組みを重ねる。	A	A	A	本校職員が県内の学習塾訪問し、学習内容や入試について説明した。塾により青翔の知名度等は様々であるが、昨年よりも周知されているようである。	訪問すべき塾はほぼ精選され、県全体を本校職員全体で広報活動を進める体制が整った。来年度の訪問計画を早期に立てる。	ホームページに学校の教育活動が多く掲載され充実してきているが、さらに、保護者や地域住民の一層の理解を得る工夫を期待したい。
		学校新聞「青翔Spirit」や育友会会報「翔揚」を発行し、保護者・生徒・地域との交流を深める。また、パンフレット等を作成し、広報活動を活性化させる。	A			「青翔Spirit」を年3回、「翔揚」を年2回発行し、保護者・生徒・地域との交流を深めた。		
渉外	育友会活動の充実と活性化を図る。	年に2回の広報紙「翔揚」を発行して、広報活動の充実と研修会等の活性化を図り、保護者との連携を密にしながら育友会行事への積極的な参加を促進する。これによって、保護者と教職員の協力体制による教育活動を実践する。	A	A	A	行事ごとに役員のみまもりができ、運営が円滑に進んだ。体育大会や文化祭では生徒や教員との交流が深まった。クラス数減による役員数や引き継ぎ方法が危惧されたが、学級委員の努力で事なきを得た。 まほら会の評議委員会を図書室で開催した。「南極レポート」等タイムリーな内容を盛り込み、好評であった。	今年度に育友会規約を改定し、学級委員数の減少を食い止めた。 まほら会では、卒業生数が半減したため、収入に見合う活動内容を精選する必要に迫られている。	活動に支障がないように改善等を期待したい。
	同窓会（まほら会）活動の充実と活性化を図る。	まほら会評議員とクラス幹事との連携を強め、卒業生の同窓会行事への積極的な参加を促し、同窓会活動の充実を図る。	B					

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題 (評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 (結果・分析) 及び改善方策
進路指導	個々の生徒の個性の伸張に努め、意欲的に進路実現をめざせる環境づくりに努める。	スタディサポートや各種進学補習、校外模試を計画的に実施し、学力伸長の機会の充実を図る。	B	B	各種進学補習の参加者が例年になく少なかったが、その分、生徒一人ひとりに目の届くきめの細かい指導ができた。	あらためて、日々の授業を大切に、家庭学習の時間の確保ができる生活習慣を身につけさせることを常に意識して学習指導にあたる。	進路指導室の資料やIT環境を整え、進路選択に必要な情報を生徒等に提供している。 各種の模擬試験を利用した進路指導で、3年間を見通して進路指導を計画的・組織的に進めている。
		進路資料等の整備・充実を図り、生徒への的確な情報提供に努め、進路実現に向けて高い意識をもてる環境づくりに努める。	B				
	理数科単科高校の特色を生かした進路指導に努める。また、中高6年間を見通したキャリア教育を推進する。	「探究科学」を生かした受験指導により、国公立大学及び難関私立大学の理系学部への合格者数を20人以上にする。	B	B	高校1・2年での学会発表等の参加には積極的であったが、基礎学力の定着に向けて地道な努力が不十分であった。	次年度高校3年生には「探究科学」の実績作りと基礎学力定着をバランスよく両立させる。	SSHの経験や3年間の探究活動を推薦入試等に生かしている。 生徒の発達段階に応じた体験的な活動を通して中高6年間を見通したキャリア形成に努めている。
	中高一貫教育校として、校種間や学年間で連携をとりながら、発達段階に応じた6年間のキャリア教育を推進する。	B	中学でのキャリア教育では、職場体験、大学研究室訪問、職業人講話、大学出前授業等多くの取組をおこなった。		2年生以下は、基礎学力定着により力点を置く。		
理数SSH部	自ら探究する力と伝え合う力を高める「青翔スパイラルアップ・プログラム」、科学英語の実践的な活用能力を高める「青翔グローバル・コミュニケーション・プログラム」、体験を通して視野を広げる「青翔エクスペリエンス・ラーニング・プログラム」を体系的に結びつけることで、科学技術系グローバル人材を育成する。	「青翔スパイラルアップ・プログラム」に基づき、本校SSHの根幹となるPPDCAサイクルを重視した科目「スーパー探究科学」(中学校では「数学探究」「理科探究」)の更なる研究及び実践を行い、各種学会ジュニアセッションでの発表生徒を昨年度より増やす。	B	B	生徒の「スーパー探究科学」における研究レベルやプレゼンテーション力については、昨年度よりも少し向上しているが、各種学会ジュニアセッションでの発表生徒数は、全校生徒数の減少の影響もあり62名と昨年度よりも減少した。	より多くの生徒たちや探究担当教員に学会参加への啓発を行うとともに、参加費用についての手立てを行う。	SSHの取組により、数学・理科だけでなく、英語に関する生徒の興味・関心も伸びてきている。今後、これらの取組が学力に結びつくよう、更なる事業の改善・工夫を期待する。
		「青翔グローバル・コミュニケーション・プログラム」に基づき、SSH科目「スーパーサイエンス英語」に関する更なる研究及び実践を行うとともに、海外姉妹校との交流を推進する。海外研修をとおして、英語検定の受検者を昨年度よりも増加させる。	A		SSH科目「スーパーサイエンス英語」等での効果的な指導により、生徒の英語でのプレゼンテーション力は飛躍的に向上した。タイ姉妹校との交流も年々盛んになっている。英語検定の受検者も延べ182名と昨年度よりも増加した。	来年度から学年全員参加となる「SSHアメリカ海外研修」の研修内容を検討する必要がある。	
		「青翔エクスペリエンス・ラーニング・プログラム」に基づき、SSH科目「スーパーアナライズ数学」に関する更なる研究と実践を行う。課外活動「青翔アラカルト・ワークショップ(SAW)」については、生徒の選択率を昨年よりも増加させる。	A		SSH科目「スーパーアナライズ数学」においては、新たに大学と連携したプログラミング実習を行うなど、授業内容の改善を図った。課外活動「青翔アラカルトワークショップ」における生徒の選択率も昨年度の15%増となった。	来年度から新たに始まるSSH科目「スーパーロジック国語」について、実施内容や成果の検証方法について検討する必要がある。	
	SSH第1期からの成果を県内外の中学校・高等学校に普及し、全国でも数少ない理数科単科高校としての特色を明確にする。	7月に行う「サイエンス・ギャラリー」については、連携校の数を昨年度よりも増加させる。2月に行う「スーパー探究科学研究発表会」については、発表内容の一層の充実を図るとともに、来場者数を昨年度よりも増加させる。	B	A	「サイエンスギャラリー」においては、SSHの主対象生徒数の増加に伴い、発表ポスター数も激増した。また、連携校の数も8校と昨年度より増加した。しかし、「スーパー探究科学研究発表会」では、来場者数68名と昨年度より減少した。	様々な発表会を行う場合の他校への広報の仕方について、検討する必要がある。	青翔アラカルト・ワークショップでは、課外にも関わらず、多くの教職員が熱心に指導に取り組んでいる。そのおかげで生徒はたくさん経験の積んでいる。  SS探究科学研究発表会での生徒の発表は、研究レベル・発表内容とも完成度が高かった。また、英語を取り入れた発表も素晴らしかった。生徒たちに、確かな自信が付いてきている現れであると感ずる。
	「スーパー探究科学テキスト」の全面改訂を行い、全国の理数科高校・SSH校等に配布し、本校の探究活動の普及を図る。また、教員が県内外の研究会において、本校SSHの取組について、積極的に発表を行う。	A	「スーパー探究科学テキスト」については、基礎・基本編、研究・発展編とも改訂を行い、全国のSSH校等に配布した。各種研究会や県の指定研究による教員の発表も盛んに行われている。		「スーパー探究科学テキスト」については、生徒や他校からの意見をフィードバックしたい。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
中学 第1学年	基本的な生活習慣を確立し、集団の中で目的をもって活動できるように指導する。	・全員がしっかりと挨拶ができるように指導する。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」をモットーとし、朝ごはんを100%摂って登校できるように指導する。 ・欠席、遅刻をしないように指導する。遅刻は全員で年間60回以下にする。	B	B	挨拶はしっかりと出来るようになった。朝食を毎日食べている生徒は82%であった。遅刻は1月末時点で97回であり、目標を達成できていない。特定の生徒の遅刻が多く、不注意による遅刻の数は3割程度である。	規則的な生活習慣を確立するために、家庭とも協力して指導を継続する必要がある。 集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い集団を作っていくことができるように引き続き指導する必要がある。コミュニケーション能力を高める方策を考えたい。	今年度より2クラス体制となり家庭との連携はもちろんのこと、学級間の連携も密にし、よりよい学年集団づくりに取り組んでいる。
		・クラスの役員、係の自覚をもち、全体のために努力する態度を養う。 ・掃除に真面目に取り組む態度を養う。自ら考え工夫しながら、教室や学校全体の美化に取り組む。 ・クラスや高校生との関わりの中で集団生活のルールやマナーを学ぶ。	B		だんだんと全体のために努力する意識が芽生えてきた。学校に対する満足度も高く、9割以上の生徒・保護者が満足と答えている。掃除には真面目に取り組んでいる。 いろいろな経験をしながら、集団生活のルールやマナーを学んでいる。		
	将来について考え、目標をもって、計画的に学習に取り組む態度を養う。	・授業を中心に据えて学習する習慣を付けさせる。予習復習を大切にできるように指導する。 ・課題やレポート等の提出を徹底させる。	B	B	学習状況調査から、授業中はノートをとるのに精一杯で、自ら学習する態度が養えていないことがわかる。課題等の提出を忘れる生徒が固定化されてきた。	家庭学習を習慣化させることが最重要課題である。目的を持って、自ら学習に取り組むように家庭の協力を得ながら、継続的に指導していきたい。宿題や課題をきっちりこなすように指導を続けたい。	
		・大学への進学を前提とし、将来の進路や自信の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。 ・家庭学習の習慣を定着させる。計画的に家庭学習に取り組む態度を養う。	B		90%が毎日学習に取り組めるようになった。平日に家庭学習を2時間以上している生徒の割合が26%と飛躍的に伸びた。今後とも計画的に家庭学習に取り組ませたい。		
中学 第2学年	基本的な生活習慣と礼儀作法を身に付け、集団の中で互いに助け合い、高め合うことができるように指導する。	・「早寝・早起き・朝ごはん」の生活習慣を定着させ、健康な体をつくる。 ・しっかりと挨拶ができ、場に応じた言葉遣いで話すことができるように指導する。 ・欠席、遅刻をしないように指導する。遅刻は全員で年間30回以下にする。	B	B	挨拶はできるようになってきたが、言葉遣いはまだよくなっていない。朝食を毎日食べている生徒は76%である。遅刻は1月末時点で74回であり、目標を達成できなかった。特定の生徒の遅刻が半数を占めている。	規則的な生活習慣を確立するために、家庭とも協力して指導を継続する必要がある。 集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い集団を作っていくことができるように引き続き指導する必要がある。安心・安全で楽しい学校生活を送ることの出来る集団になるよう継続的に指導していく。	家庭と連携しながら、継続してよい集団づくりに取り組んでいる。2年になって集団行動のルールやマナーも身に付け落ち着いたクラス集団となっている。
		・クラスでの自らの役割をしっかりと果たし、クラスや学校のために協力できる態度を養う。 ・クラスの仲間を大切に、互いの個性を認め合い、高め合える集団づくりを行う。 ・学校のルールを守り、上級生としてふさわしい態度で学校生活を送らせる。	B		2年生になって、ずいぶん落ち着いてきた。様々な行事のなかで、集団行動のルールやマナーを習得している。一方、まだまだ公共心や他者に対する寛容を身につけなければならない生徒もいる。掃除は真面目に取り組んでいる。		
	主体的に学び、計画を立てて学習する姿勢を身に付けるとともに、思考力や表現力の基礎を養う。	・授業の予習、復習を徹底し、基礎学力を定着させる。 ・課題やレポートに計画的に取り組ませ、提出期限を守らせる。	B	B	全国学力推移調査では、各教科とも全国偏差値50以上をマーク・記述回ともに達成できた。GTZのCレベルは3人に減ったが、S、Aレベルの数が減っていない。予習復習に取り組む割合は減ってきている。	家庭学習を習慣化させることが課題である。中だるみにならないように、目的をもって学習に取り組めるようにしたい。家庭の協力を得ながら、継続して指導していく。成績上位者の成績も更に伸びるように指導していく。	
		・将来の進路目標について具体的に考えさせるとともに、自らの考えや意見を適切に表現し、伝える基礎力を養う。 ・日々の家庭での学習内容を充実させるため、毎日2時間の学習を習慣化させる。	B		課題等の提出を忘れる生徒が、固定化されてきた。予習復習は40%の生徒ができていない。平日に2時間以上家庭学習に取り組んでいる生徒は、昨年は33%であったのが本年度は0%である。		



評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
中 学 第 3 学年	<p>集団の中で互いに助け合い、高め合うことができるように指導する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員がしっかりと挨拶ができるように指導する。</li> <li>・「早寝・早起き・朝ごはん」をモットーとし、朝ごはんを100%摂って登校できるように指導する。</li> <li>・欠席、遅刻をしないように指導する。遅刻は全員で年間30回以下にする。</li> </ul>	B		<p>敬語・挨拶だけでなく、場面に応じた対応ができるようになってきた。朝食を摂っていない生徒は、まだ6%いる。遅刻は1月末で118回であり、目標達成できなかった。特定の生徒の遅刻、欠席の多さが目立っている。</p>	<p>基本的な生活習慣を確立することを最優先課題とする。家庭とも協力して指導を継続する必要がある。</p> <p>集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い高校生となれるように引き続き指導する必要がある。安心・安全で楽しい学校生活を送ることの出来る集団となるよう継続的に指導していく。</p>	<p>心と体を鍛え、よりよい青翔高校生となれるよう、継続的な指導に取り組み、よりよい学級集団が育ってきている。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの役員、係の自覚をもち、全体のために努力する態度を養う。</li> <li>・掃除に真面目に取り組む態度を養う。自ら考え工夫しながら、教室や学校全体の美化に取り組む。</li> <li>・クラスや高校生との関わりの中で集団生活のルールやマナーを学ぶ。</li> </ul>	B	B	<p>3年生になって、ずいぶん落ち着いてきた。様々な行事のなかで、集団行動のルールやマナーを習得している。掃除には真面目に取り組んでいる。一方、集団行動が苦手な生徒や、相手の心情を推し量ることが不得手な生徒もいるが、徐々に対応できるようになってきている。公共心や他者に対する寛容を身につけなければならない生徒もいる。</p>		
	<p>将来の進路や自身の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。進路実現のため目標をもって、計画的に学習に取り組む態度を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を中心に据えて学習する習慣を付けさせる。予習復習を大切にするように指導する。課題やレポート等の提出を徹底させる。</li> <li>・学力推移調査では各教科とも全国偏差50以上を目指す。</li> </ul>	B		<p>睡眠時間が確保できていなくて、授業中に眠い生徒が7割近くもいる。7割近くの生徒が予習・復習ができており、よく学習に取り組むようになった。各教科とも、マーク・記述回とも全国偏差50以上をクリアしている。</p>	<p>6年制の学校の多くが抱える「中だるみ」という最大の課題を抱えている。大学進学を見据えた学習ができるように指導していく。成績上位者の成績も更に伸びるように指導していく。授業を中心に据えて大学入試に対応できる実力をつけていく。</p>	<p>難関大学を見据えた生活・学習指導により、生徒の学力は着実に向上してきている。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学への進学を前提とし、将来の進路や自身の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。</li> <li>・家庭学習の習慣を定着させる。計画的に家庭学習に取り組む態度を養う。</li> <li>・各種コンテストや検定に積極的に参加する。</li> </ul>	B	B	<p>大学進学に対してもだんだん考え出しているが、目的をもって学習に取り組めるようになったわけではない。全国模試の成績上昇者も多く、達成感を感じている。平日に2時間以上家庭学習に取り組んでいる生徒は、15%しかいない。各種コンテスト・検定へは多くの生徒が参加し、検定への合格者やコンテストの入賞者は増えた。</p>			

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題 (評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 (結果・分析) 及び改善方策	
高 校 第1学年	高校生としての規範意識と、中高一貫教育の1期生として、責任ある行動のとれる生徒を育成する。	・挨拶の励行と時間厳守の習慣を身に付けさせる。また、学校や社会のルールを守る規範意識を養い、実践できる力を付ける。 ・遅刻、欠席をしないように基本的な生活習慣について指導する。遅刻は全員で年間30回以下にする。	B	B	敬語・挨拶だけでなく、場面に応じた対応ができるようになってきた。その場の雰囲気の流れ、後先考えずに行動し、他人の痛みがわからなかったり、ルールを守れないことがある。	パイオニアとして、新たな伝統を築き、後輩の模範となるように自覚のある行動をしようとしている。お互いを高め合うクラスづくりを目指したい。楽しい学校生活を送ることが出来るようにしていきたい。	基本的な生活習慣の確立と規律ある社会性の育成に継続的に取り組んでいる。	
		学級活動、学校行事や校外活動への積極的な参加を促し、集団行動を通じて仲間づくりの大切さを認識し、社会性やコミュニケーション力を養う。	A					ずいぶん落ち着いた行動ができるようになってきた。クラス内の人間関係も円滑になり集団行動も上手になってきた。
	自己を見据えた進路目標の実現に向け、様々な学習活動に積極的に取り組む姿勢を育成する。	・授業や家庭学習の大切さを理解させ、継続的な課題に取り組み基礎学力の定着を計る。また、成績向上に向けた積極的な姿勢を養う。 ・課題やレポート等の提出を徹底させる。	C	B	家庭学習ができていない者や課題提出が遅れがちな者が定着してきた。半数近くの生徒が予習復習ができていない。継続して努力する姿勢を養いたい。	「中だるみ」という最大の問題を抱えている。大学進学を見ずえた学習ができるように指導していきたい。上位者の成績も更に伸びるように指導していきたい。授業を中心に据えて大学入試に対応できる実力をつけていきたい。		大学入試への意識付けと積極的な学習習慣の確立及び問題解決に向けた応用力の向上に取り組んでいる。
		・授業やホームルーム活動、S A W、進路講演会などを通じて、生徒全員に目標を設定させ、積極的に学習に取り組む態度を養う。 ・各種コンテストや検定に積極的に参加する。	B		学校行事には積極的に参加している。また、校外で行われる行事や各種コンテストや検定においても成果をあげている。将来についても考え始めており、目標も設定しつつある。			
高 校 第2学年	自己の行いを客観的に捉えることができると共に、周囲との関係を理解し規律ある行動のとれる生徒を育成する。	・挨拶の励行と積極的なコミュニケーションの習慣を育む。 ・学校や社会のルールを守ることの大切さについて理解させ、実践できる力を育成する。 ・全生徒に挨拶の習慣を身につけさせ、集会や面談などの人前で、相手の目を見て話せる生徒率80%以上をめざす。	B	B	挨拶の習慣は、全生徒が身につけたように思われるが、さらにコミュニケーション力や規範意識を高める必要がある。相手の目を見て話せる生徒の割合は向上し、ほぼ目標値に達した。	来年度は高校生活最終学年となるので、最上級生としての自覚を促し学校生活に積極的に取組ませる。生徒の「生きる力」の育成のため、HRをはじめ学年集会やいろんな行事を通して、教員全体で生徒指導にあたる。	クラス活動や学校行事を通して基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上に取り組んでいる。	
		・クラスでの活動および部活動や学校行事への積極的な参加を促し、社会性を養成する。 ・部活動継続率90%以上を目指す。	A		部活動継続率は94.8%で、部員が少なく活動が厳しいクラブもある中、頑張っており取り組んでいた。			
	進路目標の実現に向けて、様々な学習活動に積極的に取り組むことができる生徒を育成する。	・授業や家庭学習の大切さを理解させ積極的に取り組む姿勢を育成し、基礎学力の定着と大学入試合格のための応用力を養成する。 ・模擬試験における成績向上生徒率70%以上を目指す。	B	B	放課後の受験対策講座や朝学習などを通して基礎学力および応用力を育成したが、模擬試験による成績向上生徒の割合は、51.5%で、目標を下回った。	進路について実態に即した指導内容を再度研究し、第一希望の実現に向けて授業や講座が効果的に実施できるよう取り組みを深める。また、担任を中心に教員全員で生徒の進路指導に対応し、進路実現を目指していく。		生徒の進路目標に即した効果的な取組を企画・実践し教員全体でその指導にあたり、生徒の進路実現を目指して欲しい。
		・授業やホームルーム活動、面談を通じて、またオープンキャンパスの積極的な参加を促し、進路の目標を設定させる。 ・第一志望大学の合格に向けて、学習計画を立て粘り強く取り組める力を養成する。 ・学会や各種コンテスト、検定等への参加と入賞などの実績を70%以上の生徒に蓄積させる。	B		学会や各種コンテスト、検定等への参加と入賞などの実績は、63.0%で目標を多少下回った。しかし、学会や検定など複数の事業・行事に参加し、活動実績をあげた生徒が多くみられ、全体として積極的になった。			

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題 (評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 (結果・分析) 及び改善方策
高 校 第3学年	最高学年としての 自覚を持たせ、自立 と自律を促し、責任 ある行動を実践させ る。	・最高学年としてリーダーシップを發揮し、 積極的に高校生活を送り、下級生の模範とな れるよう自覚を促す。指標は、生徒指導に関 わる自己中心的な言動を行う生徒の割合を5 %以下とする。	A	A	A	最高学年としてリーダーシップを發揮 し、積極的に高校生活を送り、下級生の 模範となった。指標による評価は、生徒 指導に関わる自己中心的な言動を行う生 徒は、ほとんど見られなかった。	最高学年としての自覚は 3年間の高校生活で学ん だことの結果として得ら れたように考える。進路 実現の現実に立ち向かう 中で、社会性も培われた ようである。	高校生活のあらゆる場面におい て自立と自律を促す指導が行われ 成果が得られている。
	集団への帰属意識 の確立を促し、社会 の一員となるに向け て社会性のさらなる 向上を図る。	・学校行事をとおして、学校や社会のルール やマナーについて考える機会を設け、一社会 人として求められる規範意識の高揚を図る。 指標は、充実した高校生活を送れたと考 える生徒の割合を80%以上とする。	B	A		社会人として求められる規範意識は、向 上した。12月に実施した、生活状況ア ンケートでは、本校に入学して良かった と答えた生徒は、78%で指標に近い値 であった。(保護者は、91%であった。)		
	進路目標の実現に 向けた高い意識の養 成と、粘り強く努力 する姿勢を育成する。	・進路目標を設定させ、目標実現に向けて授 業に集中する態度を促す。指標は、授業に集 中を欠く生徒の割合を5%以下とする。	A	A		目標実現に向けて授業に集中を促すなか で、進路決定後一時期、授業に集中を欠 く生徒が一部(割合は、指標の5%以下) 見られたが、改善された。	進路目標の実現にあたっ ては、自己の可能性の限 界に応じて高い目標をも って取り組み、第一希望 に合格する生徒の割合 は、75%となった。ほ ぼ指標の値であった。	進路目標実現のための講習や面 接指導が粘り強く実施されてい る。
		・ステップアップ講座などの進路対策学習の 継続的な取組を促し、積極的な姿勢で学習さ せる。指標は、進路の第一希望を実現する生 徒の割合を80%以上とする。	B	A		進路対策学習の継続的な取り組みを促 し、積極的な姿勢で学習させた。進路の 第一希望を実現した生徒の割合は75% であった。		

